

泌 尿 器 科 紀 要

第 18 卷 第 10 号

1972年10月

随 想

腎 疾 患 の 分 類 に つ い て

木 下 康 民*

加藤教授から腎に関する随想を求められたが、腎についてはいろいろと未解決な問題が多く、いずれも早急の解決が望まれている。その中で腎疾患の分類に関する二、三の点について述べてみたい。

び慢性腎疾患の分類については Volhard と Fahr の有名な分類のほかにも、いくつかのすぐれたものがあるが、腎生検が実施されるようになってから、患者の経過を追っておこなわれるいろいろの腎機能検査と生検切片についての光顕、電顕、蛍光抗体染色法などのそれぞれの所見との対比から得た事実の積み重ねにより、今までの分類の訂正や補遺が必要となってきた。私どもも十数年前にはじめて発表した分類を、そのご追加補正したが、分類はその目標をどこにおくかによって異なってきた。しかし、分類が臨床家にとっても、また細菌学、病理学、免疫学の立場からもじゅうぶん意をつくしたものであることを念願するならば、このような完璧なものは、いろいろな難問をかかえて、ここ当分、望みえぬ夢ではなかるうかと考えるようになった。この難問は同時に現在のび慢性腎疾患の研究がつき当たっている障壁でもある。その難問の二、三について考えてみたい。

ヒトの腎炎の発生機構を考えてみても、異常免疫と結びつく溶連菌A型との関係がじゅうぶんわかっていないということは最も大問題であるが、さらにウイルスが病因論的な意義をもっていないのかどうかということが新しい問題である。この意義を肯定したい論文もいくつかみられはするが、しかし実証性にはまだまだ乏しいようである。

腎炎の経過について考えてみても、軽い経過をもって治癒し、そのご再発も起こさない急性腎炎がある一方に、いずれは末期慢性腎炎に進行する人もある。腎炎の慢性化は個体のアレルギー位相が決定するという考え方に対して、このアレルギー位相をチェックする的確な方法を見いだせないのが現状である。たとえば IgG と IgM は補体と反応性を示すことは従来からわかっており、いっぽう、IgA と IgE は反応しないとされていたのが、近年では、反応することが一部の人がびとによって示されつつあるし、また IgG は補体と反応するといわれているが、IgG のサブクラスのうち IgG_{4b} は補体と反応しないことが知られている。腎炎の経過がこのような補体の関与の有無によって異なるであろうことは当然考えられるが、しかしこのサブクラスの測定すら容易でないこんにち、これを日常臨床の場でおこなうなどということは、

* 新潟大学医学部教授（第二内科）

今のところ、まず不可能に近いというほかはない。

慢性に経過する腎炎が、予後のうえからみると絶対に不良のもの、不良のもの、あるいは日常生活に何の規制も加えないにもかかわらず、いっこう進行のみられないものなどいろいろあって、このような患者をみていると、疾患の基本的性格が異なっているように思われる。おそらくこのような経過と予後のちがいは個体の免疫反応性の相違と考えられるが、この相違をたしかめる方法すらないのがこんにちの状況である。

このように考えてくると、腎炎の進行性や活動性を規定しているものは、個体の免疫反応性だとしても、いったいそれは具体的に何によって示されるのか、どのようにして把握しようのかということが解決しない限り、完璧な分類はつくりようもない。まだまだ問題はあつた。その中のたいせつなひとつの問題は、分類としての条件のひとつに、病態に対して奏効する治療法の示唆が分類の中に盛り込まれているということである。腎炎とネフローゼ加味の病態に対して、いろいろの薬剤があげられるが、ステロイドの無効な例の一部に免疫抑制剤が注目されている。こんにちまで、この薬剤の有効例は相当数発表されている。しかしその用法や使用薬剤の選択には的確な理論の根拠が乏しく、いわば経験的なものといつても過言ではあるまい。その理由は、これらの薬剤の化学的作用機構はかなりよく解明されているが、腎疾患の発生、進展を規定している免疫学的動的過程がわかっていないために、化学的作用機構との関連にあるべき免疫過程の対応が欠如しているということである。この点が明らかになることは、同時に新しい真の意味での免疫抑制剤の開発の可能性につながることでもある。

このように発生機構としての異常免疫の実態、免疫反応の動的過程の具体的内容がじゅうぶん把握されていない点が、腎疾患研究の、とくに臨床における研究の大きな障壁となつて立ちまはだかっている。

分類が充足しなければならぬいろいろの条件は、考えてみるととてつもなく大きな問題ばかりである。いろいろ考えながら、この二、三の問題点にぶつかり、ここ当分、完璧な分類の作成は夢のようなことだと考えるにつけても、この難問の解決は若い人たちに期待するほかはないが、今の私は、私の年齢ではカーク教授がコーネルのセミナーで講演したことばの背後にあるものと同じ気持を持つことを余儀なくされている。それは、「若い研究者は研究室で地道な研究に没頭していただきたい」ということばである。